

この夜は、これも待望の高千穂夜神楽鑑賞ができた。

お陰様で、天の岩戸を遠方より拝み、又、八百万神等が御集合なされて神議をなされたとき、天安河原にも足を踏み入れる事が出来た。研究会一行ならではの神話さながらにロマンを楽しんだ。

御一緒させて戴いた廿日市市郷土文化研究会の皆様、本当に有難うございました。

参考、天照大御神——瓊瓊杵尊——
——神倭伊波禮毘古命(神武天皇)

自然賛歌

極楽寺山の自然観察(七)

妹尾 治 人

「平良」と「原」の合流地点に中国自然歩道の案内標識が立てられている。この辺りから極楽寺山特有の赤がし、もみの木が鬱蒼とする原生林となり、気温も急に下がり涼しくなってきた。道も平坦で歩きやすく、森林浴をしながら気分よく進めた。

この参道の左上、標高616.5mのところに「星が城跡」がある。廿日市町史によると星が城には立野主膳が大永期(一五二一〜一五二八年)の頃に守居していたとある。三つの郭群を持った大きな山城であったが、今では訪れる人もなく倒木も放置されたまま、荒れ果ててとても歩ける状態ではない。

城跡には小さな標識が立てられているが、このあたりでは毒のあるツルシキミの真赤な実がひととき目につく。

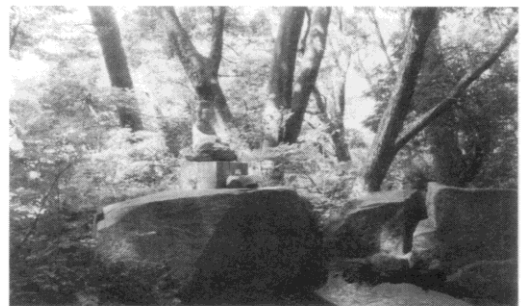
三十丁碑辺りから高山性の山野草が僅かながら見られる。確認されたものは、フデリンドウ・ギンリョウソウ・イチヤクソウ・ツルリンドウ・カンアオイ・ミヤマウズラ・ツルアリトウシ・シュンラン・ノカンゾウ・カワラナデシコ等である。

ただ、かなしい事にこの数少ない貴重な山野草を盗掘する人があつらしく極楽寺山自然クラブにより、山野草を盗まないよう切なるお願いの立て札も建てられている。

山野草は他の植物と共に成長しているもの(共生しているもの)が多く単独では生育しない。持ち帰って増やそうなどと絶対に思わないでほしい。やはり野に生きる山野草、山にあつてこそ、その価値がある。

三十一丁〜三十三丁の碑は見当らない。そのまま進むと、屏風岩と呼ばれる巨石群がある。その中に文字が刻まれた岩があるが風化が激しく読みづらい。十数個から成る巨石群の一番高い所に大日如来(67cmの石仏)が安置されている。誰が取替えるのかいつも綺麗な真赤な頭巾と前掛けをしてござる。(次ページ写真参照)

極楽寺山の豊かな森には「キノコ」も多く、森の妖精達として目を楽しませてくれるが、その中で特に注目するのはテングタケ科のタマゴ茸だ。タマゴ茸は真赤なキノコでよく目につく。名前の由来は幻菌が真白い卵のようであることによる。



その卵の殻を破って真赤な傘が出て来る。まるでお伽話に出て来そうなキノコだ。凶鑑で調べてみるとテングタケ科の仲間には毒性のものが多いが、このタマゴタケは食用で、しかもAランクの美味しいキノコだ。試みに汁物にして食べてみた。確かにうまいが煮ても真赤なままなので食べるには少々抵抗があつた。このキノコは食べるより森の妖精として観て楽しむ方がよさそうだ。

大日如来に一礼して進むと三十四丁碑がある。そこから少し坂道となり三十五丁碑を過ぎた辺りで左手に極楽寺歴代住持の墓所に通じる道がある。岩盤があるのか木の根が路面に露出している。

原生林森林浴でリフレッシュ。(次号に続く)

(自然観察指導員)

